

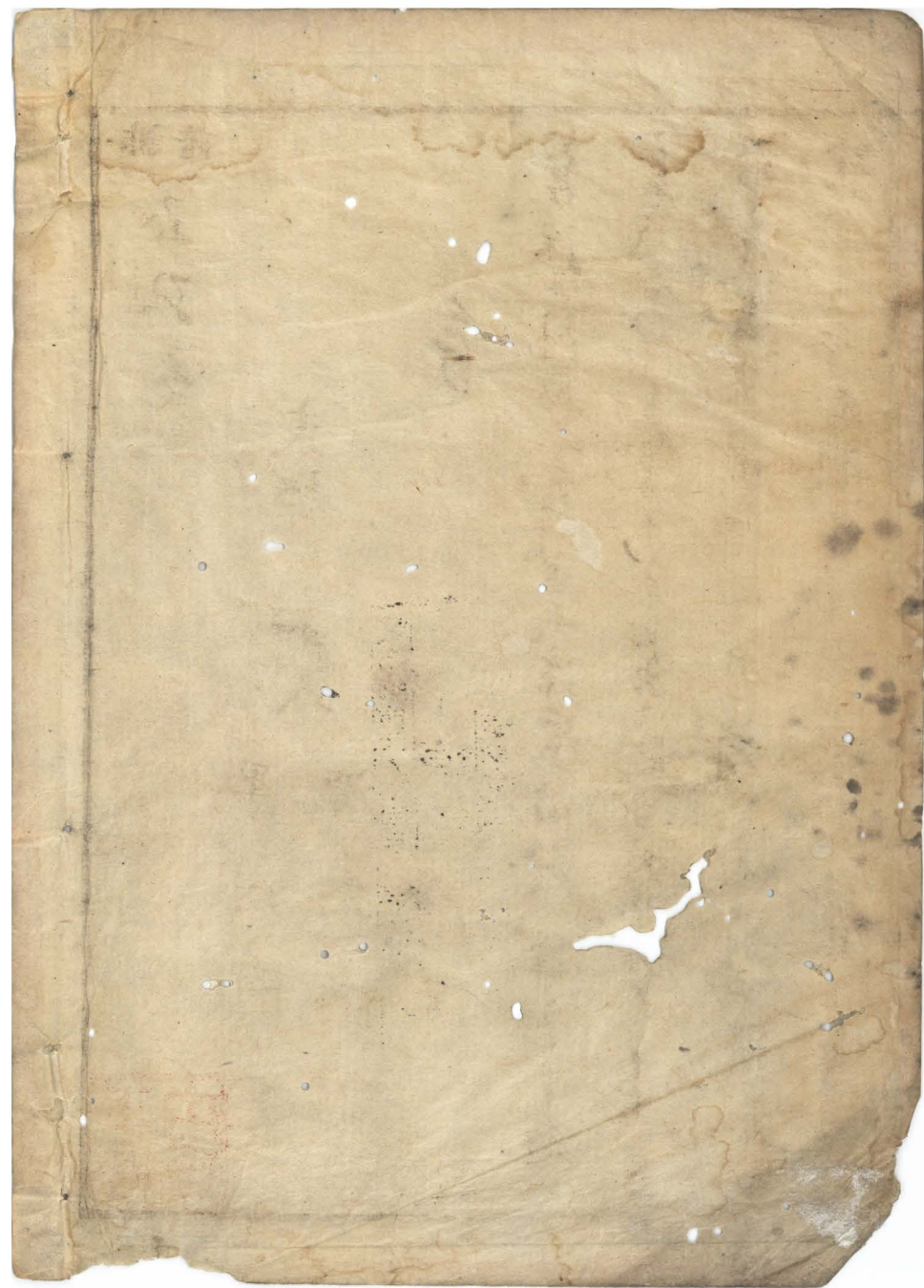
うきよ  
い玉の  
おのり  
り

841-2 (済)

俳諧資料カード

年代	天保十二年
編者 (筆者)	黒樹園
書名	はな玉の おのり
備考	..

(下垣内蔵)



誹諧 玉の光

東都

門人

果樹園選

源季隆篇

序

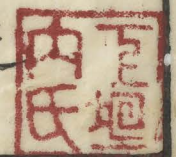
京市阿賀北五丁目三十三番八号  
下垣内和人  
電話〇六三三七一九四五番  
T737

管弦子律の事。詳ふ天逆素波あり律あり時ハ  
東よりあつて受りて子とは此より之の時ハ此よりあつ  
たり。歌ハ在り持。尚書曰詞を承りて之を  
評訛之何所。別是も辭也。評ハ雅長を指す

玉の光

壹

俳諧を評談す。評ハ天逆素波ハ此の  
意ありて活用の妙所あり。評ハ雅長ハ別あり。事あり。  
今也評訛世ハ行ハ執。若鄙貴。候ハ此也。是應為の  
流ハ正風ハ持す。第一派の說道無三の如め評訛  
事ハ此より持す。評ハ此評訛風ハ無事あり  
先ハ音義言令の由り明らむ。さうと當其を指せ  
私ハ此ハ此評訛の由り明らむ。さうと當其を指せ  
と事ハ師ハ多つたり。此ハ此評訛の由り明らむ。さうと當其を指せ





附言

芭蕉翁俗談平話乃誹諧真立乃始め先づ北村季吟の門に入りて大御厨  
乃言義天迹素波乃例格を學ばし猶佛頂禪師亦多し親相を得りし  
正風蕉門乃一道ありて今も猶も天下晋く依りて其末を汲ふる  
なり。はきとせりて其本義を編べし。俗談平話と示され多猶の言令  
天迹素波乃予の歌に雅言に而已りて誹諧の用は正をよ及てを  
此事とくゆきしん以て其意を傳へし。俗談の俗通の平話又の但誹  
方言等取交へて其の如く辨せしめし業ありしを以て  
なり。俗談といへば言令天迹素波の其中にありて俗談又平  
例有言令れし時ハ過現未にお悔ひし。天迹素波多し其時ハ自  
他を以てしる事ありしを物なり。今乃誹士を多し其上飯  
名乃正理を知りしに歌をむ人の誹諧を嘲る事ありしなり。

玉乃光

多し。誹諧本々のみなり形も業ありしなり。今乃誹士の如くありし  
と甲誹士の以て其子おたり事ありしを以てしる事ありしなり。  
翁の能く歌學を一通達し言義天迹素波を誤る事ありしなり。今乃  
乃とされしは其源の如くなり。此れが及乃道ありしなり。今乃  
も學ばしに依りて能く其意を傳へし。例格を以てしる門人ハ亦寸  
近し。及の如き。今乃其の文章誹句を誤りし。門人其角  
嵐雪許六支考がたし其傳り多し。然中て支考も漢  
學の支ありて和字を以てし。誹語を以てし。今乃翁の正  
没後ありしなり。其の如く天下の獨歩を以てし。何ぞと翁の正  
傳ありしなり。天迹素波乃事ハ廿五ヶ條の例格を以てし。  
今乃蕉門乃真秘しし。口傳といひ傳へし。誹道のを以てし。  
世人は之を以てし。今乃翁の正實の例格を以てし。

ハ言令を知りたるハ。皆天迹表波子なりていおく事。  
此子等を切字とていひ下。皇國の言令字をわき切て事。  
こゝにありともわききく。嘘言なりけり。其貳拾五ヶ条と

○第一頁むしとぬる事。第貳治定とぬる事。第三片ぬ  
る事ぬる事。第四く字ぬる事。第五及び用ひぬる事  
第六やの字ぬる事。第七及やの字。第八やの字。第九及は  
たの字。第十く字ぬる事。第拾壹志く字ぬる事。第拾貳  
第拾貳志ぬる事。第拾三志ぬる事。第拾四志ぬる事。第拾五志ぬる事。第拾六志ぬる事。第拾七志ぬる事。第拾八不定ぬる事。第拾九用表抱ぬる事。第拾拾句字魂を入る事ぬる事。第拾拾

玉乃光

壹休字ぬる事。第貳拾貳く字ぬる事。第貳拾三、四やの字。第貳拾  
四隔句ぬる事。第貳拾五回字の事。

○此列貳拾五ヶ条乃名目とて言令天迹表波の波ぬる事。  
しるし水に何る哉。言義例格乃存る事ぬる事。五ヶ音ぬ  
る事。量毒者の事ぬる事。五ヶ音ぬる事。五ヶ音ぬる事。五ヶ音ぬる事。  
五階十行乃列格もぬる事。法用字ぬる事。各一知。附はたぬる事。  
つむしん或は控へ字不定ぬる事。附はたぬる事。附はたぬる事。  
すうは是支考の形見ぬる事。嘘言ぬる事。せとぬる事。後  
の能士必依。用ぬる事。あふ水。依りて。迹頂本居宣長著す。  
細鏡の言令者きく事ぬる事。先づ世に影を心人の鏡に  
さす。あふ水ぬる事。天迹表波子ぬる事。いさかた  
きく。あふ水ぬる事。初字子。後たぬる事。初の細鏡を始とて解すの



と移るるをわづらひしの中何れか歟り辭皆きこ移る例あり事ハ  
壹段ハ備へて本句ヲをえて無き事也。又これといひ集りたる  
付ハテキヲを延へて水ノ二音ト取へてとむる例也。又これハ花  
とりに名を我とるハ水仙と名をいへるまじひにて本云をわき  
りてきこ成の移りしを中をわきりて初ハ歟り辭ハ例定り何  
りて下れ結い辭もみづりあり。是故天迹素波乃とわきり  
多奴鏡四三条合へて百貳拾九段ハ辭サも其格を備へる  
物也。然れども此奴鏡ハ唯大凡ハ例格をわきりて物サといへる  
一といひし。是等ハ歟りきを學びしをわきりて門人源ハ  
季隆ハ著ハ其ハ之ハ辭ハ至聖纏へて史を身たり其本言り  
移言ハ其ハもていへる一と云へり。行奴鏡ハ保りも  
明向ハもていへる一と云へり。

五ノ卷

凡例

○此書ハ初學早見ハたぬ事ハ誤字トて下ト誹書ト古ト云り  
用いて排道ト通用ハ文字ハ改めり。我ハ聖票を芥子楮棠を款  
冬鮭を鮭河豚を鯉ハとていへり。けはくはとていへり。とていへり。  
づゝゝ排ト眼刻ハとていへり。はりてとていへり。

○此書ハ奴鏡ハ言例ト效して本句ヲを携へ備へるもたぬ事ハ書  
中ハ註トていへり。奴鏡を本トていへり。

○右ト云ハ徒ハ歟り辭中ト云ハ我ハ何ハ歟り辭  
左ト云ハ我ハ歟り辭ト初ト云ハ畧言ト云り

○也ハ歟りト云ハいへり。とていへり。とていへり。とていへり。とていへり。  
ハ。本句ト排道ト中ト著トト其ハ風也ト云ハとていへり。とていへり。  
ハ。とていへり。とていへり。とていへり。とていへり。とていへり。



壹 段 右現在志

山里志菊兼お持梅心芭蕉

白魚のふき呼も法まうね士峯

徒丈小子帰来會一石の上芭蕉

中同き

ぞ子之の消えん後至阿き新の菊芭蕉

の家灯の疾く出て花の多き能順

や葉子をたく白魚也取の消ぬへき芭蕉

何筆力をまし子をくる凡兆

左同し

ある名をりと名て我空り独多佛花兼載

玉乃光

壹段の辞へおき之の格と云はれ  
中の左を記を延く御とある  
是を現在のおきと云

右は 右 徒

此戴段の辞の志 志き志くの格と  
云右の志中の志きを延くを延く  
志りれとある是と現在志  
志きある

現在志

うき  
たの  
うき  
こひ

同志き

うき  
たの  
うき  
こひ

同志れ

うき  
たの  
うき  
こひ

段

本志を志きの二言物れは志とある  
辞と志と上日御とあり  
此志を又志と志りれは御と

中ぞ の や 何

左 我





四段 右小き

え 葉大松子妻 ちをちち けりえ 軌半

も 新らう 富士も あり 五月晴 胡園

徒 為葉付 小次郎老 して 小倉止 梅宇

中か

ぞ 碎りき 枝阿ふ 形あり 桐の音 幾葉

の 波乃浮 葉若草 しくも のこめ 南浦

や 鶴乃子 葉や 移進し けり 加丈

何 いく志 ち折時 多消え あり 海乃止 紗川

左か

我 雪形う 成て 我来あり 梅の音 唯中

玉乃光

十一

此て... 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは...

いひてき けりてき

ありてき ありてき

右 ち も 徒

き

ありてき ありてき

五 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは...

いひてき けりてき

ありてき ありてき

中 ち の や 何

き

ありてき ありてき

いひてき けりてき

ありてき ありてき

段 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは...

左 ち 我

き

ありてき ありてき

玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは... 玉乃光の音と云ふは...

能順





七段 右丁

え	と	杉	風
と	雪舟引や使む	亀	洞
徒	駕考や岩を屏風よ	柳	居

中丁

ぞ	那物さひ	吉	貞
の	初子の日持	蓼	太
や	池の雪鴨や	千	代
何	灯も	祐	甫

左丁

我	藤	梅	路
玉乃光	十四		

玉乃光

十四

此段乃せりせりせりせり下十四段のせりせり  
 柔くさくの癖ハ為為乃延音ま  
 古今乃子殿つらうせりのたをひま  
 了為の延せり為の延せり

右 丈 毛 徒

せり

中 だ の や 何

せる

左 ち 我

せ 水

段

八

八段 右せり

た野子海しそを霞乃風味きり 野牧

毛山々 古立遊きり 立甫

徒 中納言國信

中せり

ぞ 折し終い見芳りぞき 女高き 貞和

の 真の浦用多き人の昔居き 梅白

や 山畑子麦厨やき 焼りま 和風

何 拵籠子何乃味き みるさる 鬼重

左せり

我雷とて我灯りよ 玉乃光 曾光

玉乃光

十五

九

此等ありあつと云辭いきてふ阿乃物くも辭とあふも奇なり

右 文 毛 徒

あり

中 ぞ の や 何

あり

左 あり

あり

段









右 せり 中 せり 左 せり 拾四段 八段のそりおしり

右 てり 中 てり 左 てり 拾五段

右 へり 中 へり 左 へり 拾六段

右 めり 中 めり 左 めり 拾七段 拾貳段のまゝおしり

此五韻の證句少くは二不交へ何れもあつた辭の墨繩に註あり

えりけ 時子むつき 梅のさき けり 拾貳段のまゝおしり

もりけ 委子あきし 春も けり 暁 臺

後りけ 時鳥後水音 けり 小笠越え 關 更

後りせ 氷音く 偃氣み 咽をく 白きり 芭 蕉

のせ 竹の音 百歩の 履又 遠く せり 嵐 雪

玉乃光 一 思

玉乃光 二十

もり 暮しと 委も けり 門の松 嵐 蘭

もり 啼入や 指の 埒も けり 馬 六

もり 音の 百の 名も けり 蓼 太

後り 砂をむく 浦人 云 けり 春の 鳴 關 更

後り 委子 跡 けり 羽衣 舞の 語水 揚き 女 芭 蕉

何り 委子の 麻 是 思 けり 春 裳 お 那

何り 月 けり 志 けり 海の 産 お 那

此格の 辭も 委の まを 委の まを 委の まを 拾三段の けり

咲き 聞き 委の まを 委の まを 委の まを 聞けり 聞けり

見透し 委の まを 委の まを 潤きり 又 遠きり 潤きり

見透し 委の まを 委の まを 潤きり 又 遠きり 潤きり



拾八段 右水り

た 其葉さく神 是守 是り 是の宿 能 順

も 相の葉さく神 是守 是り 是の宿 鬼 貫

徒 是の葉さく神 是守 是り 是の宿 言 水

中水り

だ 是をゆき 是守 是り 是の宿 能 順

の 是をゆき 是守 是り 是の宿 雪 孝

や 是をゆき 是守 是り 是の宿 致 畫

何 是をゆき 是守 是り 是の宿 卉 州

左水り

我 風よき 是守 是り 是の宿 岱 水

玉乃光

二十二

此ぬい他は平乃ぬいとす。成程乃意也。此辭ハ過去現在の間ニある

右 七 毛 徒

ぬ

コト其位と四柱の言乃過去乃意と

ありぬ ありぬ ありぬ ありぬ ありぬ

中 七 毛 徒

ぬ

ありぬ ありぬ ありぬ ありぬ ありぬ

左 七 毛 徒

ぬ

ありぬ ありぬ ありぬ ありぬ ありぬ



貳拾段

右つ

を と い え の み を え 川 を 巻 去 來

も 丹 波 路 や 綿 の 花 の を ら も 見 つ 闌 更

徒 親 の 夢 見 下 つ も 那 に 空 芭 蕉

中つ

ど 世 の 鳥 を 海 に 我 見 け る 鶴 雲 布 山

の 留 お ん に 鏡 を 風 の 氷 り つ 隴 岱

や 友 お ん 来 え や 啼 け る 仙 氏

何 い つ 海 の 波 を 形 り 片 敷 茶 清 水 萬 比

左つ

牡丹 を 我 ぬ き や え つ 是 咲 け る 立 汎

玉乃貴

二十四

貳拾壹段五韻混交

此段の律ハ壹音轉クハテテその  
振ハハ奏ス。其ノハ律ハハ重振  
ト任セリ

右 え も 徒

為 來 得 寐 經

中 ぞ の や 何

ま を ら 得 寐 經

左 を 我

ま を ら 得 寐 經





貳拾貳段

右片

才

才より我を人子

以 雄子の孝

花童

毛

毛又之ぬ等

以 梅の香

嶺松

徒

旅人の寐耳

以 雲のわけ

千川

中片

ぞ

秋虫ぬと

以 秋朗

嶽路

の

葉の香羽

以 葉の香

愚然

や

春來ぬと梅

以 山の春

木心

何

石より木

以 雲の香

盤經

左片

ふ

ふりて

以 葉の香

湖鳥

玉乃光

二十七

貳

拾

三

段

△此片を付くは此段の括りなく  
き辞よりなり。但後の誤り。此段

右片

る

乃辞の第一位乃ちよりうらうら  
括り。辞の墨繩を以て其片  
きを初む

△ ちりりり  
いりりり

ちりりり  
いりりり

中片

る

△ ちりりり  
いりりり

△ ちりりり  
いりりり

ちりりり  
いりりり

左片

る

△ ちりりり  
いりりり

△ ちりりり  
いりりり

ちりりり  
いりりり

貳拾三段 右

人未<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>暮<sup>レ</sup>の秋  
 湖 恋  
 東 暎  
 東 順

中

泥紙<sup>レ</sup>衣<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>の昔<sup>レ</sup>ぞ<sup>レ</sup>おも<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
 巴 明

免<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>梅<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心  
 照 嘉

何<sup>レ</sup>梅<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>香<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>雪<sup>レ</sup>女  
 千 代

左

花<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>  
 蝶 友

玉乃花

二十八

貳拾

此<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>孫<sup>レ</sup>て  
 自<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>葉<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>を

右<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>徒<sup>レ</sup>  
 〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>  
 〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>

中<sup>レ</sup>ぞ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>

他<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>耐<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>  
 〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>

〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>  
 〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>〇心<sup>レ</sup>

左 吉抄

〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>	〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>	〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>	〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>
〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>	〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>	〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>	〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup> 〇心 <sup>レ</sup>



貳拾五段 右す

近道 す 葉月 す 山 す 芳成

も す 山 す 正 方

徒 深川 す 水車 す 千 輜

中す

ど 春風 す 波竹

の 秋 す 東 圭

や す 良 海

何 岸 す 古 仙

左す

我 能 す 桐 葉

玉乃光

三十

貳 右 す 徒

つ

○此下を舟より自他二格より辭と  
きん。立いた所を何と云ふと  
おとくをまぢるは他格と云うたて  
と云ふは云うと云ふは他格と云うたて

是亦のり墨繩を委

中 す 何

了

おとくをまぢるは他格と云うたて  
了了了了了了

左 す 徒

了

おとくをまぢるは他格と云うたて  
了了了了了了

段 六 拾 貳

貳拾六段 右つ

左月 ち お 川 反 し 梅 と 香 那

毛 竹 と 音 月 ち い づ 蓮 の 上 樂 山

徒 思 ひ ま つ 津 名 の 呼 吸 の 芥 子 の 宗 圓

中つ

乃 蕪 お や う き ふ 如 ぞ 撫 ま た つ 蕪 守

の 木 枝 の 吹 走 ら ま い の 日 の お 付 る 南 籬

や 角 落 て 力 や お つ る 鹿 の 友 近 之

何 何 思 ひ 出 る て 櫻 の ち う る つ 幽 窓

左つ

我 ん さ ち ち し 月 ち お い ん 細 代 ち 牧 童

玉乃光

三十一

右 え も 徒

ぬ

い  
か  
う  
た  
片  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ

中 ん の や 何

ぬ

い  
か  
う  
た  
つ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ

左 ち 持

ぬ

い  
か  
う  
た  
た  
た  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ  
ぬ







三拾段

右ゆ

そ 其の中は能く是ゆゆ子に定

了然

も 雲の浮舟之跡を付く人(七)た(也)

其明

徒 三尺の軒をぬき見ゆ(ゆ)影(月)

仙美

中ゆ

ぞ 思ひ(る)妻(我)少(ゆ)う(い)ろ(る)明

梅翁

の 十(と)和(や)事(有)る(の)眼(子)見(ゆ)

佃坊

や 旅(人)の(在)川(や)越(ゆ)る(事)有(る)

暁臺

何 椽(の)ぬ(れ)心(こ)こ(こ)越(ゆ)る(事)有(る)

芭蕉

左ゆ

我 香(留)る(内)に(我)き(ゆ)水(杉)の(間)

野棠

玉乃光

三十五

右  
え  
も  
徒

了

な  
か  
み  
ま  
や  
志  
な  
か  
み  
や  
志

中  
だ  
の  
や  
何

了

な  
か  
み  
や  
志  
な  
か  
み  
や  
志

左  
了  
我

了

な  
か  
み  
や  
志  
な  
か  
み  
や  
志

三拾壹段 右

影 と 取り て 有 る 有 る 藤 の 葉

毛 入 仕 舞 ふ 月 の 花 に あり て 芳 美

徒 初 五 や て 有 る 母 を 子 に 中 に 岸 久

中

乃 林 風 有 着 我 の 心 を 琴 の 音 の 如 し 光 玉

乃 妙 風 や 家 子 の 家 の 阿 の 木 白

や 家 あり や 夕 山 の 燈 の 更 闌 更

何 何 の 心 を 何 の 心 を 清 く 水 の 子 を 義 當

左

我 去 ま ち い ち 我 の 心 を 水 の 山 に 岳 岱 船

玉乃光

三十六

此段より上皆三行あり

右 え 毛 徒

う

植 匏 づ づ

中 ぞ の や 何

う

植 匏 づ づ

左 我

う

植 匏 づ づ



了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...  
 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる... 了るの切れる...

玉乃光

段		三		拾		三	
此段より以下六韻は右中俱り 受け給ふるの如く。上九段の 様共にかかかるといふは づひつゝの如くは 此六韻の様にきくまはらう うんといふは...		中 ぢ の 也 何		右 大 毛 後		左 子 我	
。	け	。	け	。	け	。	け
さ	け	さ	け	さ	け	さ	け
け	け	け	け	け	け	け	け
ま	け	ま	け	ま	け	ま	け
け	け	け	け	け	け	け	け

三拾三段

右

たふふふふふふふふふふふふふふふふ

車庸

も日くくくくくくくくくくくくくくくく

蝶夢

徒 権平や能の勢りを賣たり

芭蕉

中

び 年のいぢきききききききききききき

月下

の 杉舞や志ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

芭蕉

や 喜も子ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

千代

何 猫の姿いふふふふふふふふふふふふ

嵐雪妻

左

吾 是て了持命と續け

兔士

玉乃光

三十九

三

右  
も  
も  
徒

光

拾

中  
だ  
の  
也  
何

四

段

左  
了

せ

ろ川  
な  
か  
の  
ま  
ま  
ま  
か  
の  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

三拾四段

右屯

才 暮や 是光 鏡抄久す 門の垣

芭蕉

毛 詠し さらし 毛 筆くす 筆 巻

專阿

徒 委う 委めし 詠たし ぬの 委 芥の味

芭蕉

中屯

ぞ 皆 燕 ぞ 七角 下 中 甚 早 丸 影

良朴

の 海 ぬく ぬの 牙 小 柳 庭 寸 暮 の 月

杉風

や 委 右 寺 一 柳 干 尺 谷 の 系

句空

何 名 月 や 寺 川 吹 柳 毛 寺 本 集 の 鳩

洒堂

左屯

我 杉 の 琴 子 たり 小 了 柳 小 かせ 女 七 夕

明々

玉乃光

四十

。 左 川

三

右 七 毛 徒

流

右 川

拾

中 だ の 欠 何

毛 川

五

左 了 柳

了

左 了 川  
了 了 了 了 了 了 了 了 了 了



三拾六段 右ふ

左 泥掛やひり口に う 喰ふ 猿の面 芭蕉  
 毛 約多や麻を子 も 以 ふ 其の代 季吟  
 徒 涼 さ や 古葉を う 小 ねの塵 蓼太

中ふ

ど 穀之 鴨 と 香 と 葉物 を おも ふ 百里  
 の 大東や 蝶 の 如 多 を 舞 ふ 舞月 文艸  
 や 人 の や 中 の 批 犯 と ふ 山鳥 芭蕉  
 何 仙臺 を 大 字 人 を 何 と 以 ふ 跨山

左へ

我 露之 水 の 聲 を 我 と 月 へ 月 を 素丸

玉乃花

四十二

段	七	拾	三
左 <span style="border: 1px solid black;">う</span> 也	中 <span style="border: 1px solid black;">ど</span> <span style="border: 1px solid black;">の</span> <span style="border: 1px solid black;">や</span> <span style="border: 1px solid black;">何</span>	右 <span style="border: 1px solid black;">え</span> <span style="border: 1px solid black;">も</span> <span style="border: 1px solid black;">徒</span>	
<span style="border: 1px solid black;">ぬ</span>		<span style="border: 1px solid black;">む</span>	
左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span>	左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span>	左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span> 左 <span style="border: 1px solid black;">ぬ</span>	

三拾七段

右む

そ別るや委む子子鏡をあらむ

其角

も強さめぬ後むたさやむ獨の月

百里

徒古ゆや陸飛去むあみ音

芭蕉

中む

ぞ月ぞまむまのよは鳥の聲

能頃

のまゆやゆきの花産む杜若

林鴻

や川端より鳥や涼む雪の聲

且精

何五月雨や何を葉子波む流る人

鞭石

左め

我まよるまよるあむ我はくえ花の下

重霞

玉乃光

四十三

三

右む  
も  
徒

る

る  
志る  
よる

中む  
め  
や  
何

る  
ちぎる  
る

八

左む  
我

色

る  
志る  
よる  
ちぎる  
る

段

三拾八段

右

え 秋の暮子 え 山底の る 時鳥

正由

も きのおま る 又 る 花日子

色山

徒 来 る や里の山 る 畑 る 水 る

曉臺

中

ど 相 ど 暮 る 後 る 山 る 鹿 る 阿 る を

休斗

の 陽 る や 柴 る 胡 る の 糸 る 竹 る 為 る 是 る

芭蕉

や 丹 る 波 る や る 小 る 鹿 る 山 る 雪 る 解 る 山 る

兩色

何 り 水 る や る 竹 る 山 る 海 る 苔 る の 味 る

其角

左

我 這 る 人 る 我 る 所 る 愛 る 習 る 色 る 鳩 る 牛 る

素輪

玉乃光

四十四

此段より以下五韻ハ三位の音凡切ル

後きをうぬ 抄の音の辨 若水

ハ皆切ル 後きをうぬと。若水

ハを撰り往何

右 え も 徒

ん

中 ど の や 何

えん

えん

えん

えん

えん

段

九

拾

三

左 る 也 る

免

えん

えん

えん

えん

えん

三拾九段

右ん

た  
くふより  
た  
書付  
消さ  
ん  
此三の者

芭蕉

も  
宵  
花抄  
川子  
も  
お  
ん  
延  
切  
色

其角

徒  
之  
日  
や  
お  
子  
懐  
か  
り  
右  
刀  
さ  
う  
ん

鬼貫

中ん

ぞ  
岸  
焼  
の  
お  
抄  
あ  
う  
ん  
さ  
り  
る

其角

の  
子  
や  
泣  
う  
ん  
そ  
子  
乃  
母  
子  
暇  
の  
暗  
ん

嵐蘭

や  
初  
言  
茶  
ま  
ま  
や  
切  
う  
ん  
猫  
子  
巾  
を  
ん

芭蕉

何  
り  
末  
い  
さ  
う  
そ  
と  
お  
色  
ん  
多  
の  
色

作者不知

左ん

我  
雷  
島  
の  
子  
尚  
極  
子  
出  
た  
抄  
阿  
々  
め

其角

玉乃光

四十五

四

右  
え  
も  
徒

らん

中  
ぞ  
の  
や  
何

拾

左  
お  
抄

らん

段

四拾段 右らん

たふろく た 藤ま らん 乃月 宗順

も 藤 らん 乃月 蓼太

徒 花 らん 乃月 仙阿

中らん

た らん 乃月 芭蕉

め らん 乃月 康樂

や らん 乃月 越人

何 らん 乃月 我

左らん

我 らん 乃月 重五

玉乃光

四

右 らん 徒

けん

中 らん 何

らん

壹

左 らん

けん

段

四拾壹段

右けん

た 鐘舎 た い ち り ん ま り 鐘

芭蕉

え り の 月 海 月 と 涼 き お は り ん

蘿裳

徒 風 の 吹 る り ん ね 遠 い 星

如琴

中けん

た 夕 顔 の 咲 く 我 の り ん 舟 遊 女

千景

の 落 月 粧 梅 の を り の 海 と り ん

龍足

や ま の と の や 着 り ん 遊 と り ん

一髪

何 い つ の 村 人 の 落 り ん 白 深 と り ん

李由

左けん

我 意 の 道 の 海 と り の 意 志 原

風志

玉乃光

四十七

四

拾

貳

段

右 た も 徒

左 ん

中 た の や 何

左 と 我

右 ん

四拾貳段 右形人

光 燒くはとも子 中 崩 中 人 中 人 中 人 任口上人

も 形 糸 糸 の 自 中 人 中 人 中 人 素活上人

後 橋 中 人 中 人 中 人 中 人 唐 尔

中 中 人

ぞ 古 志 志 志 子 林 中 人 中 人 中 人 中 人 畔 霞

の 相 形 形 形 形 形 形 中 人 中 人 中 人 玄 音

や 星 合 合 合 中 中 中 中 中 人 中 人 中 人 芭 蕉

何 此 形 形 中 人 中 人 中 人 中 人 お 形 中 人

左 中 人

我 中 人 中 人 中 人 中 人 中 人 花 堂

玉 乃 光

早 人

段	三	拾	四
		中 <span>中</span> <span>中</span> <span>中</span> <span>中</span>	右 <span>右</span> <span>右</span> <span>右</span> <span>右</span>
			左 <span>左</span> <span>左</span> <span>左</span> <span>左</span>
			中 <span>中</span> <span>中</span> <span>中</span> <span>中</span>
			左 <span>左</span> <span>左</span> <span>左</span> <span>左</span>

四拾三段 右マ〜ん

て 田の目も 接子も 舞きまを [マ〜ん] 峯 旭

も [マ〜ん] ちま〜ん 家あ〜ん 智〜ん 姉も [マ〜ん] 菊 守

徒 [マ〜ん] ね〜ん [マ〜ん] 月も 菊 狸 鯉 遊

中マ〜ん

ど 池も あ〜ん のりも [マ〜ん] 又 [マ〜ん] 和 糖 露 童

の 音も 百も 月の [マ〜ん] のり [マ〜ん] ちり 安 文 更

や 義 忠 [マ〜ん] 答 [マ〜ん] や [マ〜ん] [マ〜ん] 五月 為 左 來

何 [マ〜ん] [マ〜ん] [マ〜ん] [マ〜ん] [マ〜ん] 花の 喜 貞 義

左マ〜ん

我 月 [マ〜ん] 下 接 赤 [マ〜ん] 考 [マ〜ん] 又 [マ〜ん] 女 [マ〜ん] 波 氏 花 專 順

玉乃光

四十九

前段に引けき、四拾三階三条百貳拾九段の辞、いせん、本末張  
ぶき、例格の取、ゆ、を、あ、い、お、あり、此、分、ら、ゆ、く、の  
の、得、取、り、と、い、ど、と、お、中、有、く、終、む、引、り、謝、儀、辞、の、類、は、  
津、と、い、へ、る、書、を、取、り、一、巻、一、く、ま、を、一、扱、又、辞、の、下、に  
か、ま、と、法、の、あ、ら、い、例、あ、る、こ、う、と、い、ふ、ま、う、形、に、上、り  
ぞ、や、何、も、我、お、の、お、り、辞、を、お、ま、き、ま、す、中、の、ま、う、お、ま、ま、い  
後、ろ、と、い、ふ、一、然、れ、ど、ぞ、や、何、も、我、と、ら、い、ど、も、我、も、  
あ、ら、切、り、扱、の、辞、あり、我、も、ま、の、辞、あ、ら、い、下、に、毎、か、形  
と、形、が、例、あり、お、切、れ、れ、一、を、お、ま、り、と、い、ふ、ま、い、あ、ら、い、  
其、辭、が、例、も、形、い、ま、の、ま、り、又、下、に、辭、を、起、一、ま、う、お、ま、  
結、ぶ、時、い、ま、一、か、ら、ば、ま、が、つ、形、の、よ、い、ま、も、徒、の、形、あり  
辭、より、形、あ、ら、い、ま、い、お、ま、り、扱、の、取、り、ゆ、を、い、ま、ま、あ、ら、い





何 **天** **以** **之** **也** **二** 亦 **之** **也** **一** 土華五七本 季 東

何 **竺** **急** **也** **以** **之** **也** **二** 五月の如うり 芭 蕉

大 **我** **之** **合** **也** **之** **能** **き** **口** **也** **之** **我** **之** **人** **馬** 鶯 對

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

大 **我** **初** **さ** **之** **も** **之** **道** **之** **も** **笑** **け** **い** **之** **も** 利 剪

五乃光

也 **夕** **影** **也** **林** **之** **さ** **海** **之** **露** **子** **之** **芭** **蕉**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

也 **乃** **履** **也** **花** **之** **お** **の** **世** **を** **嵐** **か** **嵐**

子はそを... 遠里

や夕影や 雛子や 陽々 天々 宿 遠 里

其の... 又秋息のや...

や 羽け羽や 風車 葉々 花の付 薄 芝

物も... 玉乃光

玉乃光

何り又...

か 本るく... 蕉

是の初... 芭 蕉

や 初言... 芭 蕉

や 子や... 嵐 蘭

め形... 此書ハ

是つてお母をそむる傍へて初学懐中子たると之を直せし子言ひの要子  
 体少くおれんやの切を抜といへるは子切を抜の辞なりやと  
 例より後抜よりやといへるは皆くくはひのやめくは下下はひ  
 辞なりとけくきあのと却てし。切き漢き此辞とどきも

切や	べ	く	あ	え	た	や	や
疑のや	べき	か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や
		か	あ	え	た	や	や

如形き、例ありき定り物とあり。下。我れもれきくは抜ありて切  
 る。子平話の活用は際より子平話あり。又何と我と二言熟して  
 切を抜とあり。辞あり。抜の多きといへる

何ぞ 不決し初め神の 以川きぞ 我の 鋭 其 角

初と何と抑といへるは抜の辞とあり。又我を隔てて之り

何ぞ 何ぞ 我 我 人の 長 刀 去 来

玉乃光

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫

何ぞ 何ぞ 我 我 珠 数 操 延 操 祐 甫





黒樹園道舊著

大津源季隆編

所藏

天保十二年丑初冬

玉乃光

五十七終

黒樹園著述誄書諸目

源季隆藏

天邇表波早学

誄諧玉乃光

全壹冊

此書ハ叙鏡四拾三段三条百貳拾九段ヲ辭ト古人ノ誄句ノ言格ヲ撰ニ當テ了々々々ノ例格ヲ知ラむト早學ハハ懐中小冊ナリ

誄諧

辭乃浪華津

近刻

全三冊

此書ハ誄諧ト用少クモ俗語ノ例又音便ナリ  
之ノ以テ仮名ノ特用所ナリト云々ト注ニ俗語ト以テ言義ノ例アル事古人ノ句ヲ以テ了初學ノ疾ニ安ク書キナリ

誄諧

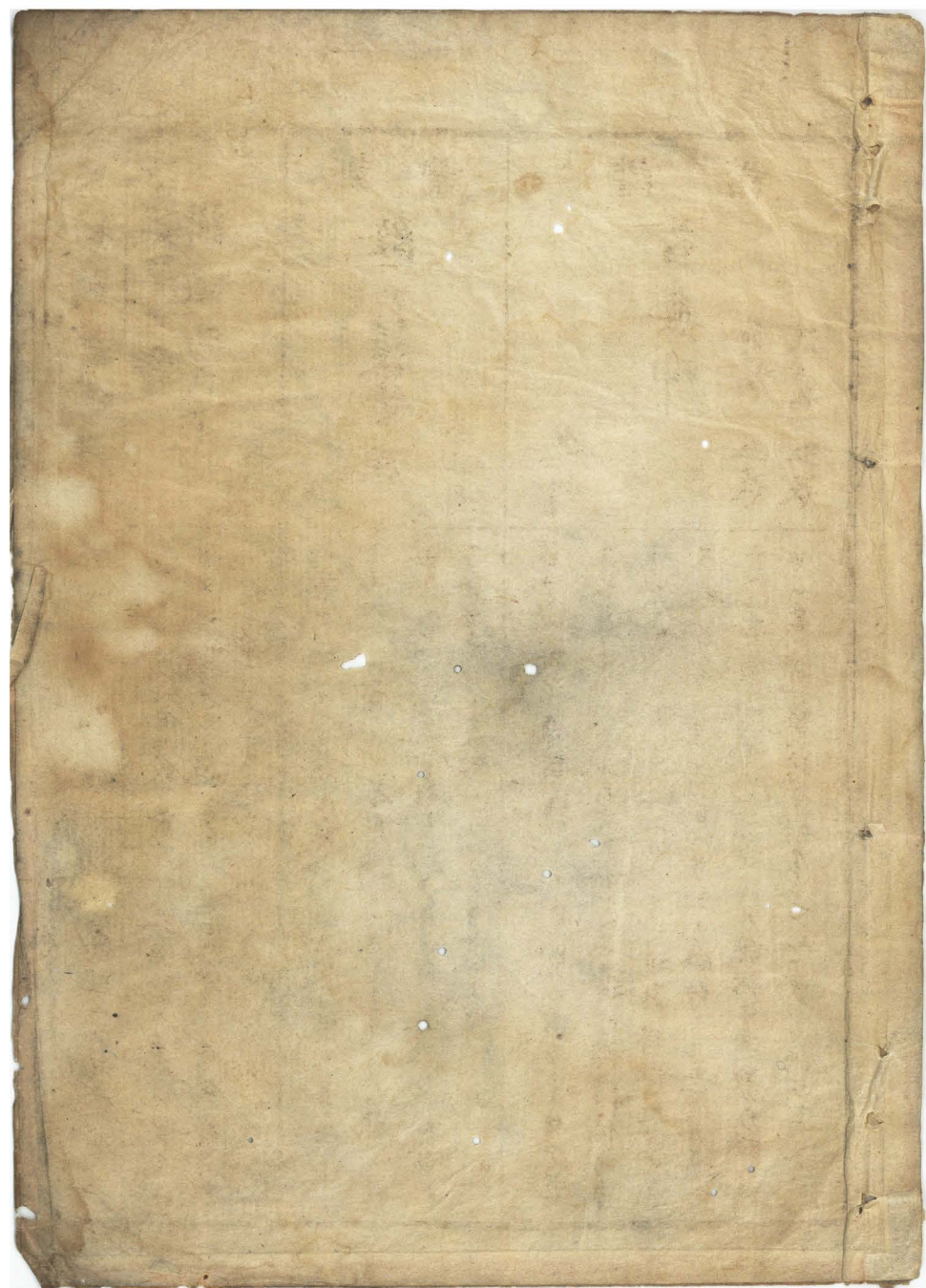
名無州

近刻

前篇 五卷

後篇 五卷

前篇ハ誄諧ノ盤觴ニ皇國ノ歌子ヲ作ト極  
初めト云々代々ノ連歌ト一道ハ誄諧体ナリ  
ト云々ト蕉門ハ一巻ト云々ト道ヲ排凡起キ  
本義ヲ注ニ後篇ハ漢土ノ聯句ト皇國ノ連句  
ト云格云々ト云々ト又世ノ誄諧ノ連歌ノ諷調  
ト蕉門ノ一格ハ排凡起キト云々ト註云々書ニ



西子江舟行  
丁巳日

鐘國時植

未  
日  
草

23

4

